

様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年5月20日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2005～2008

課題番号：17520110

研究課題名（和文）

「初期読本」はジャンルたりうるか 近世中期小説史再構築のために

研究課題名（英文）

Can We Call "Shoki Yomihon(Early Yomihon)" The Genre Name In The History Of Japanese Literature In Mid Edo Period

研究代表者

木越 治 (KIGOSHI OSAMU)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：10109093

研究成果の概要：近世小説史の記述に用いられる「初期読本」というジャンル呼称は、その始発に位置する都賀庭鐘自身が明確に有していたそれ以前の小説と自らのそれとを区別する意識を受け継いで設定されたものである。また、その発展とみなされる京伝・馬琴らの江戸読本とも一線を画そうという意図をも内包している。それゆえ、今後の文学史記述においてこのジャンル呼称を用いる場合は、こうした評価軸を意識しつつ、所与のものとしてではなく、選ばれた作品のみに与えるジャンル名として用いていく必要がある。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	500,000	0	500,000
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,300,000	390,000	2,690,000

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：初期読本 文学史記述 都賀庭鐘 上田秋成 明治の文学史 藤岡作太郎

1. 研究開始当初の背景

現在の近世文学史においては、寛延2年(1749)刊行の『英草紙』(都賀庭鐘作)をもって読本というジャンルの始発とし、以後、同じ作者の『繁野話』(明和3年刊)『莠句冊』(天明6年刊)あるいは上田秋

成の『雨月物語』(安永5年刊)や建部綾足の『西山物語』(明和5年刊)『本朝水滸伝』(前編=明和10年刊)さらに伊丹椿園の諸作等、同じ系譜にあるとみなされる作品群をたどりつつ、寛政初年までに上方で出版された一群の小説を「初期読本」な

いし「前期読本」(以下ここでは「初期読本」と呼ぶ)と一括し、寛政11年(1799)に刊行された『忠臣水滸伝』以後の江戸読本(=通例「後期読本」と称する)と区別するのがふつうである。そして、この「初期読本」というジャンルは、それ以前の上方面における浮世草子の流れにかわる新しい小説群のひとつとして、「談義本」「初期洒落本」等とともに近世中期の知識人の手になる散文学の一ジャンルとして記述されていくのである。

しかし、宝暦末年から、明和・安永・天明と推移していく上方の小説・散文界をその実態に即してながめるとき、「初期読本」というジャンルを立てることがはたして妥当な記述態度といえるであろうか？ 私には、それが実際の出版状況から帰納的に導き出されたものとはどうしても思えないのである。たとえば、明和9年刊行の書籍目録に登載されている、ある程度文学的な内容を持つ散文作品群(書籍目録における分類項目としては「教訓」「奇談」「風流読本」等に分散している)を取り出して検討してみるとよくわかるが、そこにはまことに雑多なものが集められており、とてもひとつのジャンルを形成しているとはいいがたいように思われるのである。そのことは、享保14年版書籍目録や宝暦4年版目録における「仮名物草紙類」や「風流読本」の項に掲出されている八文字屋本系浮世草子群の圧倒的な存在感と比較すれば一目瞭然である。すなわち、浮世草子や八文字屋本というジャンルは、小説出版の実態から帰納的に導き出されたものと考えていいが、どうやら「初期読本」というジャンル設定はそういうものではないらしいのである。

本研究は、そういう疑問を手がかりに、「初期読本」というジャンル設定の淵源をさぐり、より実態に即した文学史記述とはどのようなものでありうるかを調査・研究するために立案されたものである。

2. 研究の目的

(1)「文学史」をどのように構想するか、というのが本研究の基礎にある問題意識である。それは、『英草紙』や『雨月物語』という江戸中期のまことに魅力的な散文作品群がどのような時代意識の所産として生み出されたのかということ、自らの手で明らかにしていきたいという願いに発している。具体的に言うと、宝暦～寛政に至る上方の出版状況を自分なりに調査し、その実態をつかみとっていくこと、これが本研究の第一の目的である。

(2)こうした実態調査をベースにしつつ、ありうべき「文学史」記述とは、どのよう

なものでなければならないかについて考察すること、これが本研究の第二の目的である。

3. 研究の方法

(1)宝暦～寛政期において上方で刊行された書目データの作成

まずは、宝暦から寛政にかけて刊行された書目を選び出す作業が必要である。この作業は、国文学研究資料館HPにおいて公開されている「古典籍総合目録」を利用することによって比較的容易に行なうことができる。ただし、取り出した書目データを本研究に必要なものとそうでないものとに分類していく作業は、最終的には、一点一点について判断していくことになるので、かなり時間のかかる作業になると予想される。

おおざっぱな分類がすんだら、年度ごと及びジャンル(分類)ごとに書目刊行年表を作成していくことが次の作業になる。この段階で、採録したデータから省くものを決めていく必要がある。写本の大部分(歴史文書等が大量に含まれている)や演劇関係(=浄瑠璃・歌舞伎及び絵本番付等)、黄表紙等の絵本類、和歌、漢詩文関係書などがその候補である。

のデータにある書目から、上方で刊行されたものを選び出し、そのなかで、本研究にかかわりの深いものを選定していく。実は、この作業が本研究においてもっとも手間のかかる部分なので、先行研究の成果を上手に利用していく必要がある。

(2)文学史記述にみる「初期読本」

同時代において、これらの作品は、どのようなものと認識されていたか、各種資料を探索し、可能な限り解明しておく必要がある。

この課題は、明治以降における近世文学史記述の問題という側面を持っている。従って、特に明治期に焦点を合わせて、この時期に刊行された日本文学史・江戸文学史のなかで、今日初期読本に分類されている書目群がどのように扱われているかを見ていく必要がある。

(3)上記(1)(2)の調査・研究を踏まえて、「初期読本」というジャンル設定の有効性を考察していきたい。

4. 研究の成果

(1)宝暦～寛政期における刊行書目の調査
宝暦初年から寛政末年までに制作・刊行された書目のうち、本研究とかかわり深い作品を、「日本古典籍総合目録」から抜き出してみると以下ようになる。(かつてのように冊子体報告書であれば、これらの

すべての書目を掲げ、書誌データなども掲出しつつ年表形式で一覽に供するところであるが、今回はすべて割愛せざるをえない。「日本古典籍総合目録」の分類により、それぞれの点数を掲げるのみにとどめておく。）

読本	219 点
物語	38 点
説話	4 点
滑稽本	184 点
戯文	26 点
教訓	268 点
実録	48 点
狂文	24 点
戦記	34 点

計 845 点

なお、この一覽の「読本」には、宝暦以前に刊行された『通俗漢楚軍談』(元禄 3 年序、同 7 年跋)に代表されるいわゆる「通俗もの」約 20 点が含まれていることをお断りしておく。本研究ともっとも関係の深いジャンルなので下限は他と同様寛政末年としたが、上限はやや広めにとる方がいいと判断した結果である。

この一覽表の最大の欠点は、これら書目すべてについて、上方の版が江戸の版かというような検討を行っていない点である。先行研究を参考にすれば判明するものもいくつかあるが、もちろんそれだけですべてを網羅することは不可能であることが抽出された書目一覽から明らかになった。すべてを明らかにするためには膨大な作業量が必要であるが、それをこの程度の規模での研究形態でカバーするのは不可能である。これが明らかになった段階で、当初の目的を変更し、書目とジャンル名の収集のみに切り替えることにした。これにより、近世中期上方の出版の実態を把握するという、当初目論んでいた目的のひとつはなかば放棄せざるを得ないことになってしまった。それは研究計画の見通しの甘さに起因するものであり、今後の反省材料としていきたい。とりあえず、さきに掲出した一覽表は、「日本古典籍総合目録」に基づくこの期の出版のおおまかな傾向を知るための基礎データと割り切って利用することにした。

ただ、そういう限定をつけたうえでも、この表の作成過程で、指摘可能な問題はいくつが浮生してきた。そのひとつとして、「物語」という分類のなかに含まれている荒木田麗女の作品群をどう扱うか、という問題がある。彼女の作品はすべて写本であり、同時代における流布の状況に関しても、宣長をはじめ一部の国学者に知られていた程度で、ひろく流布したとは考えられない

性質のものである。しかし、彼女が物語制作を通して志向するところのものは、和文体をベースにして小説を制作した上田秋成や建部綾足ら初期読本作家と重なる面があり、写本作家であるというだけで無視することはできないであろう。彼女は、伊勢の地で夫の庇護のもとに創作を続け、その作品の多くは伊勢神宮の文庫に奉納したということであるが、そういう彼女の制作のあり方と、初期読本の作者たちのありようの違いについては、なお考察すべき点が多く残されているように思われるのである。かつまた、「初期読本」というジャンルには彼女のような作家 他に荷田在満作の『白猿物語』のような作品もあるし、本居宣長の「手枕」のように学者の余技として書かれた物語作品等も視野に入れていく必要がある 含まれないのが普通であるが、それではこの時期の散文のありかたを考えるうえでは洩れ落ちてしまう問題が多いと思われる。

その意味では、一口に「初期読本」といっても、実際に考察の対象としている作品は多く見積っても 30 編前後であり、きわめて限定された作品のみを対象にしているということがわかってくるのである。当初、「初期読本」というジャンルの問題については、「研究開始当初の背景」に記したように、同時代の出版状況を調査することによって問題の掘り起こしが可能になると考えていたが、そうではなく、この時期の 800 点以上に及ぶ作品群のなかから、今日この時において、なにを重要なもの、特色あるものとして選び出し、記述していくかという、まさに文学史の「記述のしかた」の問題であることが明らかになってきたのである。

(2) 同時代における記述

都賀庭鐘は、『英草紙』序文のなかで自らの作品について「幸にして歌舞伎の草紙に似ず」と述べている。同じ歴史に材をとっていても「歌舞伎の草子 (= 八文字屋本のうち時代物系の作品をさしているのであろう)」とは異なる作風であることを明確に意識していたことを示すもので、「初期読本」というジャンル設定は、多分に庭鐘のこうした自意識の反映とみるべきところがある。彼はまた、『莠句冊』序文に「古今奇談三十種は、近路の翁延享の初に稿成たるを、頃に至りて其梓を数に充なむと計るよしを聞て、むかしの春は英と虚称し、ふりぬる秋にはしげしげと荒ましかりて」と記しており、『英草紙』以下の三作品を連続する作品群と意識していたことがわかる。

こうした意識は、「唐土の吉野」(天明 3

年刊)序文が庭鐘等の作品の中国典拠をあれこれ穿鑿しようとする態度や、椿園が『水滸伝』の序文で『水滸伝』が作品としてのすぐれているゆえんを説いたうえで「我邦また涼岱なる者の著せし『本朝水滸伝』あり。作意の巧拙はしらず、文辞上世の体に擬したれば、識者の案上にも到るべし」と先行作である綾足の『本朝水滸伝』に言及しているのも、やはり一種のジャンル意識に立つものといえるであろう。

こうした同時代の作者における先行作への意識のしかたをふまえたうえで、大田南畝は「都賀氏、名は庭鐘……又、戯作する所、英草紙、しげしげ夜話あり。世に行はる。今の都下よみ本の風は、これを学ぶに似たり」と記したのである。その的確な時代認識のゆえに、今日の文学史家にひろく受け容れられたと考えられる。

しかし、その一方で、江戸読本の祖を綾足の『本朝水滸伝』に置こうとする、曲亭馬琴の「本朝水滸伝を読む并批評」のような試みも存在する。これは、おそらく、天明期にその文学活動のピークがあった大田南畝と、寛政期以後にようやく自己の作品世界を形成し終えた馬琴との時代認識との差と考えるべきではないかと思われる。

ところで、庭鐘に続く上田秋成の場合は、庭鐘のように自己の小説制作を一貫した活動と考えていた形跡はみられない。彼が小説制作と国学研究や和歌・和文制作のどちらにより比重を置いていたかと問うてみると、簡単に小説制作であったと言いきれないところがあるからである。同様のことは、綾足にもいえる。さらにいえば、尾崎雅嘉の『群書一覽』巻三「物語類」に、竹取・伊勢・源氏と続く物語の系譜の末尾に『西山物語』や『吉野物語(=本朝水滸伝)』を置いているという事実も無視できない。こういう認識は、南畝や馬琴とは明らかに対立するもので、今日の文学史記述が、南畝や馬琴の側ばかりを意識し、尾崎雅嘉のような系譜意識を持たないことに対して反省をせまるものである。ともあれ、良くも悪くも、こうした多様さが「初期読本」というジャンルの複雑な性格を物語っているということができよう。

(2) 明治の文学史における記述

なによりもまず、その作品が記述に値するという認識を持たない限り、文学史記述の対象とはならない、というわかりきった事実を我々に教えてくれるのが、緒言に「本邦文学史の嚆矢」と高らかに宣言する三上参次・高津鋏三郎編『日本文学史』(明治23年刊)である。本書第六編「江戸時代の文学」が当面問題になる箇所であるが、そこで、各項目の立て方と割り当てられた頁

数を一覧にすると、次のとおりである。

第一章 総論(時代背景など)	15 頁
第二章 漢学者の和漢混和文	93 頁
第三章 和学者の雅文及び和歌	107 頁
第四章 俳諧、俳句、俳文、狂歌、狂文の類	33 頁
第五章 戯曲及び小説	108 頁

今日の文学史の中心である第四章・第五章が異常に少ないのは、この文学史が「今日国文の模範」となるべきものを求めるという意識のもとに書かれているからである。その結果として、西鶴以下の浮世草子など対してきわめて冷やかな態度しか示していないわけだが、そのことの意味について私はすでに論じたとがある(「はじめに西鶴研究のために」木越編『西鶴 挑発するテキスト』[国文学解釈と鑑賞]別冊2005年他)。さらに、本書第五章では、江戸小説のジャンルとして、御伽草紙・実録物・読本・草双紙・滑稽本・浮世草子・洒落本等をあげているが、これらはこの文学史における分類項目ではなく、当時こういう名称で江戸期の散文・小説作品が分類されていたことを示すものでしかない。この文学史独自の分類としては、「端物(附恋情小説)」「歴史小説」「滑稽小説」という三種類のみで、これがこの文学史における近世小説の分類基準なのである。こういう内容による分類は今日の文学史にはみられないもので、ユニークといえはなはだユニークであるが、ただ、読本というジャンルに関心を向ける我々には、ほとんど参考にならない文学史であることも確かである。

その点では、これに先だって同年4月に刊行された関根正直の『小説史稿』の方が、まだ参考になるといえる。この書には「読本」という項目が立てられているからである。とはいえ、京伝・馬琴以前の読本については、「読本は遠く演義の史より伝統せる実録体の書と、院本とを併せて。更に一変したるものなり。既に喜多村節信の筆記に、読本といふもの、をかしき文章にて、ぬめりたる所は浄瑠璃に類し、古語の見ゆるは、もと涼岱が西山物語を手本としたる也。ふつゝかなる横ぐはへ。といへる類ひのこと多し云々とあり。西山物語は明和五年建部綾足が著はしゝ所なり」とある程度で、『喜遊笑覧』に倣って綾足を読本の始発に位置づけていることが注目される程度(内容的には明らかに馬琴流の小説史観によるものである)で、巻末の作者略伝等を参照しても、とりたててこの時期の作者・

作品に関心を寄せている様子はいかたがえのないのである。

これに比すると、特に「初期読本」という項目を立てているわけではないが、藤岡作太郎の『近代小説史』(明治38年度の東京帝国大学における講義録に基づく。没後の大正6年に『東園遺稿』第4巻として大倉書店より刊行された)では、庭鐘や秋成へのきわめて丁寧な叙述があり、それぞれの作風の違いなどに関しても、今日からみても納得のいくしかたで記述している。本来であれば、それらのひとつひとつを取り上げて紹介すべきところだが、実は、本研究のこの部分をそのまま引き継ぐかたちで、私は平成21年度より「文学史家藤岡作太郎の研究 著作と日記の翻刻を中心に」というテーマで基盤研究(C)の交付を受けることになった。この研究では、特に藤岡作太郎の近世文学に焦点を当て、その意義を解明していく予定になっているので、その詳細については、こちらに譲ることにし、文学史家藤岡作太郎の再発見ということが本研究の大きな成果の一つであったと記すにとどめる。なお、藤岡作太郎に関しては、「主要な発表論文等」の欄に記してあるように、残された日記の翻刻と刊行をすすめており、彼の日常とその研究とのかかわりについてもさらに精細に研究をすすめていきたいと考えている。

これ以後の文学史記述の問題について大まかな見通しのみを述べておく。まず、宝暦～寛政期の散文作品を個別具体的に知る資料としては、水谷不倒の『選択古書解題』(昭和12年刊、著作集に収録)にかわるものはまだ出ていないといえる。いずれ、さきにあげたリストに載る書目を中心にこの期の散文に関する事典的なものを共同編集のかたちで編集してみたいと考えている。また、読本自体の記述に関しては、戦後の文学史よりも、戦前の新潮社版『日本文学大辞典』(昭和7年～10年刊)の記述の方にみるべき点が多い。ここでは、宝暦・安永・天明における教訓物、実録物、怪談物等に周到に目を配りながら、中国小説からの影響を軸に記述しているのであるが、こういう姿勢は、作家中心の戦後の文学史にはあまり見られないものである。そういう点も含め、文学史記述の方法に関して、あらためて検討していく必要があることを痛感させられた。

(2)「初期読本」というジャンル呼称

以上の考察によって、「初期読本」というジャンル設定は、庭鐘等始発期の読本作者が有していた創作意識を、京伝・馬琴等の江戸読本のそれと区別されるべきものとして設定したという面があることがわかっ

てきた。

とすれば、これからの我々に必要なのは、庭鐘等と京伝・馬琴を区別するものがなんであるかを的確に取り出し、明確に指し示すこと意外にないであろう。それを文学史記述の問題として果すことができたとき、はじめて「初期読本」というジャンル設定の意味が明確になって来るはずである。

議論がぐるっとまわって振り出しにもどった感があるが、私自身の中で、「初期読本」というがジャンル呼称が所与のもでなくなったこと、代表的作者である庭鐘の創作意識の問題を受け止めるかたちで用いられるべきであることを確認できたという意味で、本研究は大いなる意義を有すると考えるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

木越 治・猪俣武三・小塩禎・木原奈緒美・竹多久美子・中村清子・林秀俊・三浦純夫・宮崎明倫(金沢大学市民大学院藤岡作太郎ゼミ)編 藤岡作太郎日記・明治三十九年分 金沢大学市民大学院論集別冊 第4号 1-98 2009年 査読無

福島万葉子・木越 治 八文字屋本『風流宇治頼政』の典拠 藤岡作太郎の指摘を手がかりに 金沢大学国語国文 第34号 196-202 2009年 査読無

木越 治 修辭のゆくえ 季刊文学 第10巻1号 57-67 2009年 査読有

木越 治 恋と死 西鶴作品の「語り」を通して 国文学解釈と鑑賞 第73巻3号 149-156 2008年 査読有

木越 治 「俗」への意志 「死首の咲顔」の意味 国語と国文学 第85巻5号 62-71 2008年 査読有

木越 治・猪俣武三・木原奈緒美・高沢紀美子・竹多久美子・殿畑外義・中村清子・宮崎明倫・小塩禎(金沢大学市民大学院藤岡作太郎ゼミ)編 藤岡作太郎日記・明治三十八年一月-十一月 金沢大学市民大学院論集別冊 第3号 1-109 2008年 査読無

高島 要・木越 治・高橋明彦・木越秀子・杉本紀子 『風流宇治頼政』注釈(五・完) 石川工業高等専門学校紀要 第40号 1-12 2008年 査読無

木越 治 ふたつの「誤り」から 江戸文学 第36号 89-102 2007年 査読有

木越 治 消えた「斎宮」 『伊勢物語』

六九段と『古今集』及び業平家集 北
陸古典研究 第 21 号 69-89 2006 年
査読無

木越 治 小説の作者、物語の作者 国
語研究 第 32 号 1-19 2006 年 査読
無

高島 要・木越 治・高橋明彦・木越秀
子・杉本紀子 『風流宇治頼政』注釈
(四) 石川工業高等専門学校紀要 第
38 号 1-12 2006 年 査読無

木越 治 教えすぎないための提案二、
三 日本文学 第 55 卷 3 卷 11-19
2006 年 査読有

木越 治 西鶴を読むこと・西鶴を研究
すること 日本文学 第 54 卷 6 号
54-6 2005 年 査読有

木越 治 秋成の異国、宣長の異国 江
戸文学 第 32 号 119-131 2005 年
査読有

〔学会発表〕(計 2 件)

木越 治 垂直な改稿、水平な改訂 『春
雨物語』の生成とその評価をめぐる
大阪大学大学院文学研究科広域文化表
現論講座特別シンポジウム「秋成 テク
ストの生成と変容」 2007.3.16 大阪

木越 治 教えすぎないための提案二、
三 日本文学協会第 60 回大会
2005.10.29 相模原市

〔図書〕(計 3 件)

飯倉洋一・木越 治編 『秋成文学の生
成』 森話社刊 1-410 2008 年

木越 治 常德寺の古典籍 国書を中心
に 森雅秀編 『能登半島地震ポランテ
ィア活動報告書 / 常德寺所蔵 藤懸得住
関連資料の調査報告』(金沢大学能登半
島地震ポランティア活動プロジェクト
刊) 67-68 2008 年

木越 治 怪異と伝奇 ・ 揖斐高・
鈴木健一編 『日本の古典 江戸文学編』
(放送大学教育振興会刊) 105-128
2006 年

〔その他〕

木越 治・稲田篤信・飯倉洋一・長島弘
明(司会) 座談会 上田秋成 季刊
文学 第 10 卷 1 号 2-30 2009 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木越 治 (KIGOSHI OSAMU)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号: 10109093

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし